報告書抄録

ふりがな	こくらじょうおおてのせいだまりあとだい２ちてん
書名	小倉城大手ノ勢溜り跡第２地点
副書名	小倉城大手門前施設建築事業に伴う埋蔵文化材発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	北九州市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第621集
編著者名	川上秀秋
編集機関	(公財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
所在地	〒803-0816 北九州市小倉北区金田一丁目１番３号
発行年月日	2023年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小倉城大手ノ勢溜り跡（こくらじょうおおてのせいだまりあと）	福岡県北九州市小倉北区城内（ふくおかけんきたきゅうしゅうしこくらきたくじょうない）	40100	8338	33°53″01.″85	130°52′57.″23	20171004～20171210	362㎡	小倉城大手門前施設建築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小倉城大手ノ勢溜り跡第2地点	城郭	中世末～江戸	障子堀・土坑・溝状遺構・柱穴	土師器・瓦質土器・土師質土器・輸入陶磁器・瓦	16世紀末の毛利勝信の城郭に伴う障子堀を確認内部から金箔押しの鬼瓦を出土

要約

小倉城大手ノ勢溜り跡第２地点は、小倉市街地の中央を貫流して響灘へと注ぐ紫川下流の西岸に築かれた小倉城本丸の東石垣の裾部に設けられた大手ノ勢溜り跡に位置する。調査当時の地表面の標高は約3.2mである。

この勢溜り跡の北側に位置する本遺跡では、３面からなる遺構面が確認されており、それらの面は、上から1.近世から現代にかけての勢溜り跡、2.毛利勝信期の城郭跡、3.16世紀を中心とする時期の集落跡である。

第一面は、江戸時代の面ではあるが、勢溜りは性格上、緊急時に大くの軍勢を入れる必要から、建物を設けない開けた場所であった。このため、この面で検出した遺構の大半が明治から昭和30年代にかけての土坑・溝・柱穴であった。目につく遺構としては、石を落とし込んだ1m×0.5m程の土坑があり、調査区の北側で纏まって確認されている。これらは位置的な偏りから見て大正か昭和の広場の景観造りに据えられたと考えられる。

第二面では、石組み溝・柱穴・道跡そして堀跡が検出されている。堀は底面の３箇所に短冊形や方形ないし長方形に一段深く掘り込まれており、いわゆる障子堀の形を呈している。その内部から金箔鬼瓦の破片が２点検出され、豊臣秀吉の九州平定の後に小倉に入った毛利勝信の城普請に伴う堀と考えられる。この堀には、東側約2mと5mに平行するように石組みの溝が検出されており、東端近くの溝は石敷の道に伴っている。

第三面では、土坑と柱穴群が検出されている。柱穴群は密度が高く、これらの中から規則性のある柱列を確認するには至っていない。出土遺物から大内氏に関連する14世紀中頃～16世紀中頃を中心とする遺構群である可能性がある。